

2024.8.15

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

地域日本語支援ニュース こだま 第 446 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

■ともに生きる：ブラジルから日本へ■

令和 5 年度文化庁長官表彰授与式が 2023 年 12 月 19 日、京都の会場で行われました。総勢 87 件（個人と団体）、日本語教育関係者からは 15 人が表彰されました。都倉俊一長官から一人ひとり、名前を呼ばれて賞状を手渡しされる、そのときにひときわ大きな声で「はい」という返事が響きました。豊橋市立東陽中学校の伊木ロドリゴ先生でした。1986 年ブラジル生まれ、9 才で来日しその後、県教員採用試験に合格されて教員となり、現在にいたる道のりを 2 回シリーズで語っていただきます。

「ブラジルから来たロド先生」

～変な言語と変な文化との出会い～

愛知県豊橋市立 東陽中学校教諭 伊木（いぎ）デフレイタス ロドリゴ
(伊木 Defreitas Rodrigo)

◆ブラジル サンパウロ

私は 1986 年ブラジルのサンパウロで生まれました。

母親エミリアは、ブラジルへ渡った日本人の両親をもち、

父親エリオマルは、ブラジルで農家として生計を立てていた両親の間に生まれました。

母親は大学を中退し、サンパウロの病院の事務職員として働き、
高校中退者であった父親はその病院の配達物を届ける「オフィスボーイ」と呼ばれる仕事をしていました。
母親が頼んだ書類を届ける仕事をする父親。2人はそんな出会いをし、結婚をしました。
結婚を決めた2人は貯金をはたいて、サンパウロ市内に一軒家を購入し、母親は間もなくして赤ちゃんを授かりました。

この頃父親は自営業を始めており、
電気製品を売るお店を営んでいました。
順風満帆（じゅんぷうまんぱん）に思えた矢先のこと、
信用していた仲間に裏切られ、父親のお店が続けられなくなりました。

家のローンがまだ残っており、子どももまだ小さいころでした。
父親はメンタルをやられました。

◆パラナ州

サンパウロを離れ、家族でパラナ州へと引っ越しました。
誰も知らないパラナ州で新たな生活がはじまりました。
経験こそなかったが、やる気に満ち溢れる両親は
サンパウロの家を売ったお金を
初期投資とし、八百屋を経営する決断をします。

しかし、近所のことや地域の傾向など無知であったこともあり、
商売がうまくいきません。

商売がうまくいかないだけでなく、
両親の仲もうまくいかない時期が続きました。喧嘩を目の当たりにするときもありました。
お金というものは大きなストレスなんだな、と
子どもながらに感じていました。

八百屋が続けられなくなり、
パラナ州の田舎のアナ・テハに引っ越しました。
当時はあまり自覚はありませんでしたが、

アナ・テハは田舎というより、ある種のスラム街ともいえる環境でした。
「わが身は自分で守る」というような危なくて不衛生なところでした。

しかし、
私の両親はそれを感じさせないように必死でした。
学歴のない2人は安定した職に就けず、
日払いのアルバイトで食いつなぐ生活をしました。
そんな中でも、
母親はそのときある食材で工夫をしておいしいご飯を作り、
父親は仕事を選ばず、来るものを拒まず家族のために必死でした。
手作りのおもちゃ、手作りのゴールとゴールネットを作ってくれて、
私と弟のアンドレは幸せな幼少期を過ごしました。
両親は自分たちが食べる量を減らし、私と弟が
元気に過ごせるように必死でした。家族四人で大きな壁を越え続けました。

私たち兄弟はそんな親の家族を守ろうとする努力を目の当たりにしながら
劣悪な環境の中で親に応えようと学問に励みました。
食べ物やお金などには不自由はあったものの
近所の子どもたちとサッカーをし、夏には裏庭で水遊びをし、
楽しい子供時代を過ごしました。

そして、
7歳にして、
「サッカーのプロになり、親を楽にさせたい。これまでの苦勞が報われるようにしたい」
と本気で思っていました。

◆日本へ

1995年、両親は私と弟をキッチンに呼び、
真剣な話があると言い出しました。
「日本語が少しわかるし、
ママが先に日本へ行き、ブラジルに仕送りをする。君たちはパパとここで頑張り、
準備ができれば、3人は日本に行って、向こうで、新しい生活を始めよう」
という内容でした。

「ウルトラマンとか、ロボットとか、着物とか寿司の国！
日本へ行けるのすごい！ 楽しみ！」
テレビで見る日本のイメージと、祖父母の母国へ行けることに
わくわくしていました。

10 か月の間、母親の仕送りで食いつなぎました。
お母さんは福井県で頑張って働き家族を支えました。
父親は奥さんを 1 人で日本へ行かすことに罪悪感と不安を
抱えながらも家族のためには我慢をするしかないとも感じているようでした。

1996 年 6 月 3 日に伊木デフレイタス一家が日本で再会を果たしました。
憧れの国、日本でしたが、
本当の戦いが始まることは知る由（よし）ありませんでした。

次号へ 続く

（注）令和 5 年度文化庁長官表彰 名簿並びに受賞理由
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/93977401_02.pdf

受賞理由は以下の通り記されています。
幼少期に来日し日本語を習得した経験から、大学在学中に外国につながる子供のための日本語教室を開設し支援に取り組み、卒業後は全国でも数少ない外国籍の学校教員として教壇に立つ傍ら、県内外で日本語教育支援、キャリア教育や命の大切さについて講演を行うなど、我が国の多文化共生に大きく貢献している。
